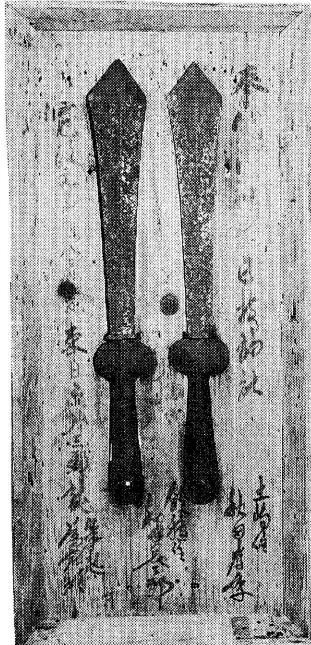


TA GEN

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

秋田孝季・東日流外 三郡誌の実在を証明



このほど、秋田孝季と和田長三郎（吉次）が、寛政元年、東日流外三郡誌の著作の完成を祈願して市浦村日枝神社に奉納した「宝剣額」が、市浦村教育委員会に、保管されていたことが判明。古田武彦氏らは、これを金属、木質、筆跡、目撃証言など総合的に調査して、疑う余地のない物であることを鑑定、秋田孝季と、その著作の実在性はいつそう確実なものと考えられることとなつた。

宝剣額は、もと市浦村山王坊日枝神社絵馬堂に懸けられていたが、昭和五十年当時、市浦村史資料編として東日流外三郡誌が出版される際編集部で写真撮影され、写真は発表されたが、実物は何処かに格納されたまま所在不明となつていていた。

彦氏、地元の協力者と共に、実物の行方を八方探索し、市浦村教育委員会に奥深く蔵されていた現物を再発見するに至つたものである。

その後も、山王坊日枝神社の宮司松橋徳夫氏が宮司を引き継がれた昭和二十四年、額は既に懸かっていたこと、前氏子継代三和定松氏は、戦前から見た記憶がある、など、地元の証言が続々と寄せられている。

寛政初年に、秋田孝季らが、東日流外三郡誌を著述する旨の記述は、現在の和田家文書明治写本の中にも、繰り返し現われている。

（関連記事二面）

70 cm、横33 cmの木製額（写真）は、縦70 cm、横33 cmの木製額（写真）は、縦

出現した寛政の奉納額

状鉄剣が飾られ、右側に、「奉納御神前日枝神社」、左側に、「寛政元年酉八月□日東日流外三郡誌 筆起為完結」、下に、「土崎住秋田孝季、飯積住和田長三郎」と墨書きされている。

古田氏らはこれを目視による鑑定のほか、東北大学金属研究所、昭和薬科大学中村教授、その他絵馬研究の有識者、地元の故老の昭和初期の目撃証言などと総合して、真実性に疑いのないものと判断し、七月一日、共同通信齊藤記者の手を経て、全国にニュース発表された。（掲載紙、産経新聞、中国新聞、岐阜新聞、神戸新聞ほか）

東北大学における金属鑑定の途中では、宝剣の裏側に「寛政元戌酉八月自、鍛冶里原太助」と、日本刀の銘のよう製作者の名が刻まれているのが発見され、その真憑性はいつそう高いものになつた。

その後も、山王坊日枝神社の宮司松橋徳夫氏が宮司を引き継がれた昭和二十四年、額は既に懸かっていたこと、前氏子継代三和定松氏は、戦前から見た記憶がある、など、地元の証言が続々と寄せられている。

寛政初年に、秋田孝季らが、東日流外三郡誌を著述する旨の記述は、現在の和田家文書明治写本の中にも、繰り返し現われている。

寛政の宝剣額出現の意義について

今回、市浦村教育委員会より出現した、秋田孝季・和田長三郎が奉納した宝剣額の意義について、高田かつ子会長が古田武彦氏に聞いた。

高田 大変なものが出てそうですね。絵馬の一種だそうですが。

古田 はい。奉納額ですが、矛型の鉄剣が一本、打ちつけてありますので、従来の慣例によって「宝剣額」と呼んでいます。

高田 「従来の慣例によって」というと、同類の奉納額が、あの東北地方には多いのでしょうか。

古田 そうです。青森県の八戸の博物館で作られた「八戸の絵馬」という、かなり分厚い目録があり、写真が載っていますが、「寛政」より前から、あと、明治・大正・昭和まで、たくさんの資料が掲載されています。それぞれ特徴があります。のぞから「宝剣額」の編年が可能です。今回の「宝剣額」は、それらの系列の中で、一番日の早さですが、形態上も極めて適正、自然な位置を占めています。

高田 その「宝剣額」には、「寛政」の年号と「東日流外三郡誌」という本の名前も、書かれていたんですね。

古田 そう。そのうえ、「秋田孝季」と「和田長三郎（吉次）」の署名もありました。二人が「東日流外三郡誌」を書きはじめ、その「完結」を折つて奉納したものです。公刊されている「東日流外三郡誌」（八幡書店版）によると、寛政元年の四月に、この日枝（日吉）神社に一人で参詣し、祈願をこめた旨記されていますから、この「明治写本」（末吉の再写）の確実性を、今回の同時代資料が裏付けることとなつたわけです。「古田史学の会」の古賀達也さんが見事な推進役となつて下さいました。

● ● ●
喜八郎氏、偽作説は崩れた

古田 すばらしいことです。これまで、これまでいろいろ言わっていた「偽作説」も、吹つ飛んだのではないかとおもいます。それが、それが、今回の「宝剣額」です。それから、「宝剣額」は、それらの署名し、指紋押捺したものさえあります。喜八郎氏、偽作説など、笑止

千万というほかなかつたのです。

古田 その通りですが、今回はも

っと意味が深いでしょうね。松川事件の場合は、「諏訪メモ」の出現で被告の無罪は証明されました。列車転覆の真犯人は、わからずじまいでした。

古田 そうですね。喜八郎氏、偽作説では、「秋田孝季」や「和田長三郎吉次」を、喜八郎氏の創作した「架空の人物」だ、と言つてきていたのですから、もう駄目ですね。

ところが、今回は、肝心の孝季と吉次（長三郎）の実在が証明された上、問題の「東日流外三郡誌」

「喜八郎、偽作説」は、もう学問的生命はありませんね。もともと、これはあまりにも無理な説でした。たとえば、彼等の「決め手」とした筆跡問題一つ取り上げてみても、私の研究室へ送られてきた、膨大な和田家文書に、貫して現われている筆跡と、私の熟知している和田喜八郎さんの筆跡とは、まったく別人なのです。何しろ、喜八郎さんの署名は当人が私の目の前で署名し、指紋押捺したものさえあ

り、確実この上ないものです。その他、種々あります。ですから、私は「喜八郎氏、偽作説」など、笑止

話では、今回の「宝剣額」の再発見は、松川事件のときの「諏訪メモ」の出現と同じだ、とのことです

古田 さすがですね。その通りかもされませんね。もう、お若い方はご存じないでしようが、国鉄転覆事件の犯人として起訴された、被告たちの「無罪」を決定づけたのが、その「諏訪メモ」の出現なのです。よ。あれは、印象的でした。被告のアリバイが成立したわけですね。

古田 今回は、喜八郎さんの「無罪」を、この「宝剣額」が証明したわけですね。

古田 その通りですが、今回の事件の場合は、「諏訪メモ」の出現で被告の無罪は証明されました。列車転覆の真犯人は、わからずじまいでした。

ところが、今回は、肝心の孝季と吉次（長三郎）の実在が証明された上、問題の「東日流外三郡誌」

との関係も、キッチリ証明されることとなつたのですからね。

【深夜のドタバタ劇】

高田 すごいですね。でも、「偽作説」の人たちは、この「宝剣額」も偽作だと言ひはじめているようですね。

古田 当然です。そうしなければ、今までの自分たちの「偽作説」が崩壊する、少なくとも一大打撃をこうむることを知つてゐるからです。

ですから、何が何でもこの「宝剣額」を「にせもの」にしたい、そういう彼等の「願望」や「あせり」を示すものとして、後世の研究者の嘲笑をまねくだけでしょう。

高田 この問題が共同通信のスクープで、各新聞社に「配信」されると、すごい「反応」が深夜にまきお

こつた、と聞きましたけど。

古田 その通りです。東北の一新聞社の担当記者が「偽作説」の学者に通報し、その双方やさらに第三

者たちから、金属を鑑定していた

だいた自然学者(東北大学教授)や発信した記者(共同通信)のところへ「深夜の電話」が殺到しました。

その「結果」、東北六県の地方紙には、一切この記事は「日の目を見なかつた」のです。全国紙として、共同通信の記事を扱う、産経を除く。

高田 ひどい話ですね。国民の「知る権利」はどうなるのでしょうか。

古田 本当ですね。国民の理性を信頼していないのです。むしろ、「恐れています」というのが真相でしょ

う。このような「深夜のドタバタ続けるほかないでしょう。そうならない、もう学問ではありません。だから、「偽作説」の同調者には、一人でも多く、早く、目覚めてほしいです。

として、連合体の結成を目指し、当面廻り持ちで、協議会を開くことが合意された。さらに将来は、共同事業としての研究誌発行、「多元中観」研究所の設立など夢のある構想が語り合われた。

力強い提言があつたのち、まず三研究会の現状の分析と、これから的发展について情報交換が行われた。

関東から、高田会長、安藤副会長、清水、西江兩幹事が手弁当で参加した。

(次号以下に統報の予定)

劇」は、学問の自由と報道の自由を犯すものであることを、未来の日本のために、はつきり申させていただきます。

古田 そうです。今、「市民の古代研究会」を名乗り続けている人たちは、大きく「学問のルール」を踏みはずしたもの、残念ながら、そう思ふばかりません。少なくとも、私の信ずる学問の方法とは、似て異なる道を歩む。そのことをここに明言させていただきます。

すね。

高田 でも、今回の「宝剣額」は、地元の方たちが古くから知っていた

もの、とお聞きしましたから、「偽作説」の人たちも、頭が痛いことでしょう。

自信をもつておられますね。今後、



「多元の会」

・・・・・ 入会のお誘い

「多元的古代」研究会・関東は「古田武彦氏の提唱された、多元的に歴史を観る考え方」に賛同し、それを継承発展させることを理念として、日本の古代の眞実の姿を研究する会です。そのほかに難しいきまりはありません。同好の皆様のご入会を歓迎します。

入会申し込みの方は、住所・氏名・フリガナ・電話番号を「明記の上、左記へ、年会費をお払い下さい。」

▼年会費四千円(今年度入会に限り入会金千円は不要です。)

▼郵便振替
□座名/「多元的古代」研究会・関東
□座番号/00170・9・768977
お問合せは事務局まで。

歴史の真実を見抜くには

最近、古田武彦氏、山田宗睦氏と共に著で「天皇陵の真相」(三一新書)を出版された住井すゑ氏に、続編を語つていただいた。いうまでもなく住井氏はベストセラー「橋のない川」の著者、文学界の最長老であるが、九二才の現在も健在で次の著作に意欲をみせておられる。

人為與法則

私は神武天皇陵の近くに生まれたが、子供の時からあれはおかしいと感じていた。それをハッキリいえないのがイヤで、早々と奈良を去りました。ウソのことに囮まれていてはたまらなかつた。

私は物事を見るのに単純な考え方をしています。人為と法則ということがあります。天皇制は人為ですが、それを法則と思ってしまうから間違う。人為を合わせると偽（いつわり）、ウソとなるでしょう（笑）。法則的な見方では宇宙の法則が最高となるが、それでいえば人間は平等であるということに尽きてしまう。

人間の歴史は人為的なもので、歴史といわれるものは本当のことと語つていい、と思います。歴史を勉強するのは楽しいが、本当のことがわからることは思っていない。想像をたくまし

に恥ずかしく思いました。自分の先祖を天皇家へのつながりに求めようとする人達が多いと感じていますが、本当は天皇制を外してみないと、何とも言えない、本当の歴史は分からぬと思っています。

くしていろいろな歴史の流れを考えてみると面白い。特に古代史は面白いという点では一番だろうと私も思います。ただそれを事実としての歴史だといわれても、信じられない。

実は私の家系は猿田彦といわれているんです。名門だといった自負が伝わっていたようですが、要するに天皇が大和へ入ってきた時に案内したわけです。ところが、その時に被差別部落の先祖に当たる人々は歴向つ

と呼んだりしていまして、中国から来た人達の集落だという言い伝えがありました。渡来して千年以上も経ち、通婚も進んでいるはずなのに、桧前村の男性はどこか違うんです。

また近くにそのものズバリの百濟村があつて、男も女も非常に力強いんです。大和男子は頼りなかつた(笑)。ここも通婚圏になつていましたが、どこか違つところが残つていました。し

ましたが、そのリンゴは被差別部落で作られたものだつた。ところが、被差別部落から直接リンゴを買うことはしません。

りません。それは数字では表わせない、科学の対象にはなりません。それなのにそこから自由にならない。世界の歴史の中で、天皇制ほど奇妙な制度はありません。明治維新、今度の敗戦と見直すチャンスがあつたのに、イギリスやアメリカにうまくやられてしまったと私は思っている。

多元史觀は天皇制を極め化するのではないかとの指摘ですが、確かに古田さんはユニークな発想をされますね。気狂いじみた発想、自由奔放な考え方ができないと、創造はできません。その点、古田さんや皆さんに頑張って欲しいと思います。

□ 大切なのは歴史的事実 □

のだろうと思ひます。事実は分かつてゐるハズだと思ひますが、知らん顔をしてゐる、賢いのか、バカなのか。昔、天皇から下賜されたリンゴを家宝のようにありがたがつた話があり

▼新刊
「天皇陵の真相」
山田宗整・主著 古田武彦著

天皇陵の真相

仮題「古代通史」古田武彦著
9月末刊行予定／原書房／予価1,000円

▼朝日カルチャーセンター特別公開講座
「繩文世界の拡大」 講師古田武彦
8月31日・9月7日・14日 全3回

水曜日 午前 10時～12時
問い合わせ TEL 03(33344)1941

▼新刊
「天皇陵の真相」
山田宗睦・住井すゑ
古田武彦共著

発売中／三一新書／750円

『古代通史』古田武彦著
9月末刊行予定／原書房／予価1,800円

TAGEN 1994.8.3

志賀島の勝馬に行つた。島の西、先端の地区である。昨年の春も、島内を徒步で巡ったとき、この集落を訪れた。よく憶えている。だが、今回は、無上の「案内役」があった。福岡市教委の塩屋勝利さんである。無類の酒好き、という人間味と共に、考古学者として論文も多い。旧知だった。

「多元的古代」研究会・九州の灰塚照明、鬼塚敬一郎の御二方の御連絡で、共に訪島、この勝馬へ御案内いただいた。

土地の故老のお宅で不思議な話をうかがつた。

勝馬地区の突端に、小島がある。潮が引けば半島。その山上に辺津宮が鎮座。約三、四十年前、その御神体を写真に撮つた。銅のくつだつた、という。帰り道、塩屋さんは、書いてもらった見取り図を前に、興奮していた。「江田船山のようないい。朝鮮製のくつかもしれませんよ。だとすれば、古墳時代のものですね。わたしには、もう一つの感想があつた。弥生時代、司祭者の儀礼用のものかもしれないな。」何か、わらじの親玉のような、その國からの「空想」だった。いずれにせよ、お頼みした写真がガラス原板を見たい。一同、共通の願いだ道ばたの草むらに、古代の遺物(刀剣状)が「落ちて」いる。そういう

場所なのだ。

さらに不思議な話があつた。勝馬地区の中津宮。例の金印は、本来ここにあった。そういう伝来を記した文書が勝馬に残つている、とうのだ。その文書を蔵するお家へおうかがいすること、それが次の楽しみだ。

その中津宮の境内(社殿前)から、長方形の三方を区画した列石が現れていた。台風で土砂が流れたあとで「発見」だつた。その下に何かが埋納されている。そういう感じだつた。管

HISTORIAE

理者である、志賀海神社の御了解を得て、塩屋さんの発掘される日を鶴首して待ちたい。

「君が代」の儀式で、一段と著名になつた志賀海神社、それは本来、この勝馬の奥津宮(本宮)にあつた。明治期の洪水のあと、現地(志賀島の東部、波止場近く)へ移転した、といふ。今も、この勝馬では「原形」をなす「君が代」の儀式が、年に二回(四月十五日・十一月十五日)とり行われている。

博多湾を船で帰つた。塩屋さんと

お別れしてあとも、興奮はさめなかつた。わたしは語つた。

「あの勝馬地区の全人調査をやりたいですね。」「えつ、「全人調査」とは何でしよう。」と、灰塚さん。

「あの地区の一人ひとりに会つて、全員、聞き書きをするのですよ。金印や土地の伝承を、何でもいい、聞きつくす。そしてそれを記録しておく。」「なるほど。」「さらに、志賀島全島の全人調査。きっと、何か出てくると思いますよ。」

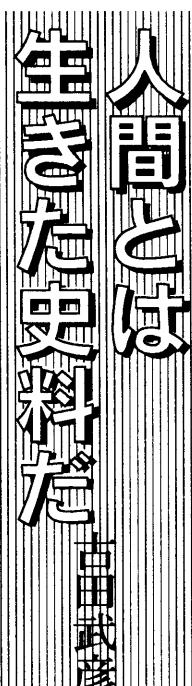
「そうですねえ。」と、鬼塚さん。「もし、何も出てこなくてもいいんであります。二十世紀現在、現地に伝わっている伝承は、何もなかつた、というなかなか調査資料となるでしょうからね。貴重ですよ。」「なるほど。」「要するに、あの「壹」と「臺」の全調査(三国志でやつたのと、同じ)。徒労を恐れず、すべて調べる。キュリー夫人の放射能検出の作業と同じやり方ですね。」

これは志賀島だけの話ではない。たとえば、神奈川県の大和市。日本最古、否、世界最古の工業製品としての縄文土器の出土どころだ。無きめつけず、神々の祭神名や神話伝承の「全人調査」。これは必ず、二十一世紀以降の人々に感謝されることだらう。

それと、神津島。伊豆七島の中で、黒曜石の産地として知られている。「配水神話」は有名だけれど、それは、そのとき集まつた「縄文の神々」の神名や伝承は。必ず、各島々に伝えられていることであろう。

人間とは、すべて、生きた資料だ。コンピューターやロボットの「原形」なのである。ただ、一生と共に、働きを終える。それまでに、正確に記録したい、どんな人の伝承でも。

★会員の皆様も「わが村(町)の古代伝説」を1000字以内でお寄せください。(編集室)



山田宗睦

日本書紀講座

告

第一回・第二回

報

快調なテンポの語り

五月から始まつた山田宗睦氏の日

本書紀講座は六月十九日、七月十日に第二回、第三回が開かれた。神代上から一字一句確かめつつ、書紀の構造を明らかにして行く。神代上は本文プラス一書、という形式をとっている。一書は第一から第六まであり、一見同じような話にみえる。書紀を通読する場合、まずつまづくのはここである。六つの一書が同じにみえるのは書紀が読めていない証拠、違ひが分かれば書紀が分かつてきたことを示している、と指摘された。

一書の性格、本文と一書の関係についてはまだ定説ではなく、山田説によると一書は異伝ではなく史料である。つまり、書紀の作者は六つの一書を史料として利用して本文を書き上げ、現一書にみるように元一書を書き直したとする。こうした関係が分かれれば、書紀の物語の順序と作られた順序が違うこと、登場する神々の前後関係がみてくる。例えば、第二の一書に登場する葉木国は第一の一

書に続くべきものである。

第四の一書の後半は古事記の冒頭と同じであり、この史料を伝えた氏族が分かれば面白いが、しかしその判定はできない。また、本文、一書を通じて神々の表記が同じであることは、作者が同じであることを示唆している。

庄巻は八柱の神、四組のカップルの解説である。最後に記述されたイザナキ、イザナミの結婚を前提にしてあとの三組はその物語に沿って擬人化されたものとする。話の作られた順序と語られている順序が違うのである。そしてハイライトはイザナキ、イザナミ。

宣長以来、イザを掛け声と理解してきた。しかし、村山七郎説に従つて日本語は南島語と縁が深いとみると、イザは最初の、第一という意味で、イザナキ、イザナミは最初の結婚をした男女のこと、初夜神話というべきものだ。また、イザナキ、イザナミは女性である青カシキ根の子という記述は二人が同母兄妹であることを意味する。書紀成立の時代にはタブー化していたはずだが、同母兄妹の結婚の話は中国を始め東アジアでは珍しくない。よくぞ書紀の中に残っていたな、という気持ちである。

ノヨロヅ、アワナギ、イザナキ——とある系譜は他には見当たらず、宋史日本伝にのみ紹介されている。宋史が14世紀の史料であることから津田左右吉は新しい伝承と見なしたが、アマノヨロヅは孝徳天皇の和風の名前にあり、意外に古い可能性がある。孝徳天皇は大化の革新の主役の一人であり、要注意である。六五四年に孝徳天皇が派遣した遣唐使は最初の大和の使節であった痕跡がある。宋史日本伝は神武以前を23代と数えるが、現行の書紀は12代である。なぜ、こうなのか。また、イザナキ、イザナミまで神世七代とあるが、神世という言葉はここしか使われていないことに注意したい。

イザナキ、イザナミが立つた天浮橋は浮桟橋のことと、國無けんや、の国とは土地を指している。ここはボリ不シアに伝わる島釣り神話と同じ種類の話で、「國中之柱」であるオノゴロ島誕生の経緯を物語ついている。矛で海を引つかき回したとあるが、矛の出土は北九州に集中しているから、イザナキ、イザナミの舞台は博多湾岸を示唆している。洲国を「つちくに」と読ませている。洲は「しま」「ぐに」であるが、この書き分けは重要である。次回江文明を追う」で、茨城大学の徐朝龍氏は「…中国古代文明は黄河流域で一元的に成立したものではなく、それぞれ「区、系」をもつ複数の文明圏として、各地で「多元的」に発生して並存し、それが次第に集約され、一つの文明としてまとまっていく」という道をたどった」と、最近の考古学の成果を踏まえて述べられている。注

ノヨロヅ、アワナギ、イザナキ——

神代の解説、解説は珍説、奇説が多い。

い。その中で、山田説は歴史学、神話とある系譜は他には見当たらず、宋史日本伝にのみ紹介されている。宋史が十分に踏まえ、書紀の構造を明らかにしようとするところに特徴と魅力を感じた。講師の語りも快調になつてきました。これからの展開が待ち遠しい。

(木村由紀雄)

▼八月 休講

▼第四回 9月11日(日)午後一時半~

3時半 ▼文京区民センター

会員制になつておりますので、希望者は事前に申込先・西江雄児

TEL FAX 048(6222)733223



月刊誌「しにか」八月号の特集「長

江文明を追う」で、茨城大学の徐朝

龍氏は「…中国古代文明は黄河流域

で一元的に成立したものではなく、そ

れぞれ「区、系」をもつ複数の文明圏

として、各地で「多元的」に発生して

並存し、それが次第に集約され、一つ

の文明としてまとまっていく」という

道をたどった」と、最近の考古学の

成果を踏まえて述べられている。注

ろん
サロン多論
些論

古代の船（大阪市出土）

小金井市 斎藤里喜代

一九九二年十一月三日朝日新聞に「伝統の丸木舟残そう—老船大工「最後の仕事」秋田」という記事が載った。内容は秋田鹿半島に古くから伝わる「男鹿の丸木舟」づくりの技術を映像と文書で記録する。男鹿半島の丸木舟は幅一m長さ七mと細長く、船底は九mmと分厚い。樹齢三百年以上の天然杉をくり抜いてつくり百年以上はもといわれる。船大工の畠山廣松さんは約二十年間で五隻の丸木舟をつくった。

以前「天声人語」で「男鹿半島で今だに丸木舟が作られて使われているのは、貧乏で今時の船が買えないのではないか、岩礁の多い場所なので、船底に穴のあかない丈夫な丸木舟が、使いやすいから」と紹介してあつたのを思い出す。

ところで古代の船だが、大阪市長原高廻り一号墳から、全長一二九m、最大幅約二六m舷側部の最大高約三七mの日本最大の船形埴輪が出土している。この船は準構造船で丸木舟の土台に巨大な堅板が舳先と艦に据えつけられ、この板は造船學から言えば、安定を害するだけで、むだな構造。出土時から謎とされ、戦闘時に矢を防いだ矢止め説や飾り説がある。

この埴輪船にはほどそつくりに復元された

木造船「なみはや」が一九八九年大阪から釜山まで実験航海をした。左右四個のオーナルをかける突起から八人で漕いだ。「なみはや」は曳航が中心で約一ヶ月で目的地へ着いたんです。加速がつくまで非常に時間がかかるイベントとしては成功した。「船が重かつた」（主催の大坂市教委）「客観的に見る漕ぎによって走らない船。うまく漕いでも

約一ノット出る出ないか」（相当の松木哲神社商船大教授）私は、この船は外洋用ではないのではないかと漕ぎた。

私は第一、函面を見た船大工の第一声が、「こんな船は出来ない」であり、現代では考えられない船である」と。

第一、松木教授自身「埴輪は実物の船ではありません。多分にデフォルメされたものであります。たとえば平たい船底も柔らかい粘土で作つたため固まるまでに潰れると考えられ、喫水線の上にある船の構造物が、異様に大きい。これではバランスが悪くて、まとめて浮かぶとは考えられない」という。

第三、この準構造船と同じ構造のものが、大阪市久宝寺遺跡から本物の木造船の部分、とくにむだな構造とされている巨大な堅板とともに浮かぶと考えられない」という。

他方「古事記」では「德記に枯野といふが遠く行く船があつた」という。「日本書紀」では応神紀五年十月条と三十一年八月条にやはり枯野が出てきて、伊豆から貢上され

伊豆の戸田村は、江戸時代（一八五三年）に来航して難破したロシア使節のブチャヤチンの船をそつくりに造つて、無事ロシアまでも着いたという伝統的に造船技術の良い所。大阪から出土した三つのドンクサイ船にくらべると本当に走るように速く行ったというのを理解できる。

私の所感では平底で上部より細い丸木舟部分は泥状の中を除けながらすべるもの。上部の幅の広い部分は水や泥の上で安定する場所。むだと思える巨大な堅板は泥よけということで、弥生時代の河内潟や古墳時代の河内湖の中を航行する船ではないかと思ふ。

私は京都で保津川下りをした時、水が少なくて川底のジャリ石を方りガリ音をさせて下ったのに驚いたが、船底は平らで、材は分厚いアクリル板様のもので作られていた。

大阪の船は丈夫で速く走らないが、河内潟は泥なので船の通りみちは埋りやすくなっているラッセル車のような大阪型の船ができるのだろ。あるいは、古代の戦いは船を沈めるのに、大砲などないので、船どうしがけあつた可能性も否定できない。舳先や艤装を車のバンパーとして、これでも、丈夫な堅板が本体となる。そんな事を考へてみた。

宮崎県西都原出土の埴輪船（十一人で漕ぐ）をもとに造つた、角川書店の野性号が「ケヤ」の実験航海ではあった。

参考図書「倭国・邪馬台國と大和王權」図録（毎日新聞社）、「幻の加耶と古代日本」（文春文庫）

一万六千年前の土器か？

古田先生と共に観る

長野県下茂内遺跡から出土した焼成土片

（径一四m）は、炭素放射能テストで一万六千年前とも考えられ、土器断片かとの想定もあります。準備中の長野県歴史館（更埴市）のご好意で、古田先生と共に七月二十日観察の機会が得られました。先生は、たっぷり一時間孰視觀察の結果「予想以上に、人工物との印象ははつきりしたものでした。ただ土器（うつわ）であるかどうか、余りにも小片であるため、断定できません。今後の資料の積み重ねが望まれます。私の仮説は、土器形成以前の発達段階の製品があるはず、ということです」とのことでした。

先生と共に貴重な機会が得られたことに感激しています。（八谷 進）

国立歴史民俗博物館友の会

千葉県佐倉市にある国立歴史

民俗博物館は、わが国最大規模の歴史博物館である。古代から現代まで多彩な展示が魅力だった。

この博物館には友の会があり、会員（年会費八千円）、準会員（同二千円）に分かれれる。主なサービスは友の会ニユース（隔月、入館料無料（通常四百円））、

売店の五〇割引（書籍を除く）などで、こ

こまでは会員、準会員共通だが会員には機関誌「歴博」（隔月、ハペー）が送られ、歴博の催しや研究陣の研究内容を知ることができる。

TEL 043(486)0123

